STA（Soft Touching Assistance）による、自閉症当事者との交流

福島県立相馬支援学校

辻　明典

私はこれまでいくつかの教育現場で、身体の一部に軽く触れることで、独力では実現し得ない目的的な動作の達成を支援する、Soft Touching Assistance（以下、STA と記す）を通して、独力では自らの意思を表現することや、自身の行動をコントロールすることに困難を抱えている、自閉症当事者たちと交流してきた。本稿では、私が自閉症当事者たちと、STA を通して交流してきた経験を、私自身が経験したそのままに、つまり現象学的に記述することを試みる。

ある自閉症当事者は、一問一答形式の、相手の知識量を試すような質問には、ある程度答えることができた。しかし、答えが１つとは限らない疑問を投げかけると、おうむ返しでしか答えられないためなのか、「周りのことがあまり理解できていない。」と思われがちであった。

ところが、言葉による交流など成立しないと思われがちな状況においても、尚諦めずに、粘り強く交流を図ろうと試み続けることで、ある自閉症当事者は他者との交流へと開かれていった。自閉症当事者の実存を志向する、直交的な言葉で語りかけ続け、手を添えて本人の動きを感じ取ったり、表情の変化を読み取ったりしながら、一緒に文字を書いたり、文字盤を指差したりすることを通して、徐々に言葉による交流ができるようになっていった。

また、状況に応じた行動が取れないと思われていたある自閉症当事者は、卒業式等の行事になると、音楽に合わせて手を叩き、体を揺らしてリズムをとったり、跳びはねたりするといった行動をとっていた。しかし、私が隣に居ながら、黙って肩に触れると、本人は場の雰囲気に自らの身体を合わせ、静かに過ごそうとするようになったのである。

以上のような、身体の一部に触れることを通した、間身体的な交流の一端を現象学的に記述することを通して、自閉症当事者との交流の可能性を示す。

【倫理的配慮の詳細】

本稿は、主に学校教育の現場で経験した、私自身の経験を記述したものであるが、これまで関わった児童・生徒に不利益が生じたり、個人や在籍校、出身校等が特定されたりしないように、仮名を用いるとともに、個人情報に配慮をした文章表現をした。